

こころ日記「ぼちぼち」 その②

子どもの死

以前、「自分が受け持つ子どもの死に出会ったことがあるか？」と尋ねられたことがありました。若いころだったので、そんなこともあるかもしれないと聞き流していました。

何年も担任をし、私の前を通りすぎていった子どもたちは、本当にたくさんの数です。学校現場での子どもの安全は第一ですが、日々の生活では喧嘩や事故もあります。校外学習、宿泊などの行事は、一分一秒たりとも気の抜けない時間でした。1年間、無事に学校生活を終えることができたこと、年度末には安堵感に浸ったものです。

ベテラン教員の域に入ったころのことでした。想像さえしなかった生徒の死に遭遇しました。

夏休みも終わり、1年生の学校生活も慣れてきたころ、連休明けのある朝、イサミの訃報の知らせが入ったのです。突然のことで「えっ？」としか声に出なかったのを覚えています。先週末には、教室で私の授業を受け、いつものように友と遊び戯れる姿が浮かびました。学校生活の中では、どちらかというとも明るさしか感じられない生徒でした。

なぜ？何があった？まさか自死？

教員は、ドラマのようなエピソードなんかより、実はもっとリアルな体験や経験をしています。事が起こっても、とりあえず冷静に受け止め、次への対応を考えることに全力を尽くすことが大切だと考えていました。

すぐに、管理職と担任、学年代表がイサミの病院へと向かいました。他の教員は、朝一番の知らせを受け、まず生徒への影響を考えました。このことをいつ知らせるのか、どのように伝えればいいのか。

職員の朝の打ち合わせの中で、そのことを議論している時間はありません。とりあえず普段どおり授業を行うこと。事情が分からないうちは、生徒への公表は避けようという結論になりました。

見えなかったもの

そのころ情報のツールとして、携帯電話が普及し始めていました。学校では禁止でしたが、中には隠して持ってくる子もいました。私たち教員は普段通りに教室に向かいましたが、生徒たちの不穏な動きをいち早くキャッチしました。休み時間の生徒の動きも妙でした。どうやら、生徒たちはメールでのやり取りの中で、イサミの死についての情報を共有していたようです。

ある生徒が近寄ってきて、「先生、イサミまだ来てないけど、死んだん？」と言いました。

放課後の時間まで、生徒たちの質問に耐えられるのか？なぜなら、私たち自身もイサミがどのようにして、どうして死んだのか知らされていなかったからです。



放課後までの時間が、なんと長く感じられたことか。

しばらくして、イサミの家族との面談を終え帰ってきた教員を交えて、臨時会議が持たれました。イサミは、自ら命を絶ったとのこと…。

家族のことを思うと、悲しみよりも言葉にならないほどの悔しさが込み上げてきました。死を選ばなければならなかったのはなぜか？イサミに何があったのか？

しかし、次の日から、私たち教員には見えていなかったことを、次々と生徒たちから突き付けられることとなったのです。

あのとき…していたら…

イサミの両親は、最初は悲しみに打ちひしがれた様子でしたが、我が子がなぜ自死を選んだのか、イサミの学校生活での様子について知りたいと連絡がありました。しかし、私たちはむしろ家庭でのトラブルが元ではと疑っていたのですが。

早速私たちは、生徒たちへの聞き取り調査を始めました。生徒たちの中には、メンタル面で大変ショックを受けた生徒がいました。そんな中での聞き取りは、なかなか厳しいものとなりました。その間にうわさがうわさを呼び、情報が錯綜していました。

色々な生徒の声から、イサミは、いつも一緒に遊ぶとても仲がいい生徒たちから、実は嫌なことをされていたことがわかってきました。一人が打ち明ける勇気を持つと、ほかの生徒からも次々と新しい事実が…。

イサミの学年は、今までになくとても落ち着いた生徒集団でした。他学年からも、いい学年だね！やりやすい！と評判の学年でした。

イサミが見せる学校生活での様子は、とても朗らかで、ユーモアのある姿でした。不機嫌な表情を見たことはありません。

生徒たちは、入学後の4月からもうすでにイサミへのいたずらや嫌がらせが始まっていたのだと打ち明けてくれました。

友達からの執拗な言葉の暴力、お金の恐喝、窃盗への強要など、教員が知らないことばかりでした。

担任は、そういったことはなかったと断言しましたが、私たちフリーの立場の教員は、実は休み時間での見回り中の生徒の様

子から、あるいは教室での様子から、疑う場面が多々あったのです。私たち以上に、生徒たちは、いじめの現場をちゃんと見ていたのです。

なぜ、見えなかったのか？あのときもう少し注意深く見ておけばよかった…。なぜイサミに声をかけなかったのか？と後悔しありませんでした。

イサミの死から、私たちは毎日遅くまで事実を時系列に並べ、加害者の生徒を特定しました。が、加害者と言われた生徒たちは、自分たちは友達だった、だからいじめではないと主張しました。

この問題は、そう簡単に解決には至りませんでした。イサミの両親は、これらの事実を知り激怒し、加害者の親も怒りの矛先を学校に向けました。私たちは、ひたすら耐える毎日を過ごしました。

私たちが一番心を痛めたのが、生徒たちからの無言の抗議です。自分たちは、先生にイサミを助けてほしいというサインを出していたのに、何もしてくれなかった…。信頼を取り戻す言葉は、見つかりませんでした。それでも、毎日の授業は淡々と進めなければならなかったのです。

死んでしまったイサミからは、もう何も聞くことはできません。

今メディアの「いじめ」の報道を見るといつもイサミのことを思い出し、辛くなります。当事者にしかわからないことが、たくさんあると思うからです。

